



Title	秋山われは：心情表現の構造を中心に
Author(s)	犬養, 孝
Citation	語文. 1950, 1, p. 8-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68361
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

秋 山 わ れ は

—— 心情表現の構造を中心に ——

犬 養

孝

—

萬葉集卷一・十六番の額田王の歌については、それが本集の初めの方にあり、且額田王の歌である処から、從來の諸註殆んどこれを取扱つて居つて、一見、意見も出つくした観があるが、いまだ疑問の点を多くのこして居り、私は特にその心情表現の構造の上より、從來とは別の見解をいだいてあるので、ここに私見を述べてみたいと思ふ。

天皇詔云内大臣藤原朝臣、競隣
春山萬花之艶秋山千葉之彩時、
額田王以歌判之歌

冬ごもり 春さり來れば

鳴かざりし 鳥も來鳴きぬ

咲かざりし 花も咲けれど

山を茂み 入りても取らず

草深み 取りても見ず

秋山の 木の葉を見ては

黄葉をば 取りてぞ賞ぶ

青きをば 置きてぞ歎く

曾許之恨之

秋山吾者

二

この歌がいつ出来たか、大津宮以前か以後か、中には天智天皇七年三月かと規定する説（桑川定一氏「萬葉集」の綜合研究第一輯「中」）もある程であるが、いづれも定かでないといつてよい。また、いかなる事情のもとに生まれながらも、題詞に明かな如くであるが、詳しい事情は定かでない。中には、天智天皇と鎌足と春秋を争はれた時、判定を下したとする説（「僻案抄」・「攷証」）、或は、諸臣にきそはせた時、秋の方人としてか両方の判者として、判定したとする説（「代匠記」）、また、天皇が、御自分と弟君大海人皇子とのいづれに心を寄せられるかを額田王にためさうとして、諸臣に春秋を競憐せしめることにかこつけて、王の判定の眞意を言はしめたとする説（「燈」等があるが、いづれも穿鑿にすぎてゐる。ともかくも、天皇を中心に、廷臣間にこの種の文雅の遊宴が行はれた折、王自身の春秋に対する心情の表白を、歌で判定したものである点には間違ひなからう。且、近頃の諸註のいふ如く、大化改新以來、大陸文化吸収の影響下にある宮廷に於いて、進んだ宮廷文化の先端に花開いた、美意識（風雅）の世界の先駆的出現である点にも、間違ひなからう。しかし、かうした問題はここでは問はないで、この歌の心情表現の在り方を探究し、今日までの各種各様の解釈の上に、更に一つの試見を加へて見たいと思ふので

ある。

三

まづ、心情表現の在り方の考察にさき立つて、この歌の中の問題多き箇所についての、吟味をとげて置かねばならぬ。

（イ）「曾許之恨之」の訓について。

宣長が「恨」の字を「怜」の誤とみて（「櫛手」）、「そこしおもしろじと訓也。うらめしにては聞えず」（「玉の小琴」）としてゐることの非なることは、古写本に「怜」字となつてゐるのが一本もないのみならず、「攷証」「燈」「美夫君志」「山田博士講義」で既に論証済みである。ましてや、「ソコシタメシ」「古義」「新考」で、「ソコシメヅラシ」（折口博士「萬葉集」）「ソコシトモシ」（尾山眞二郎氏「萬葉集物語」）の非なることはいふまでもない。最近土屋文明氏の「私註」が「文字のままウラメシと訓んでも味はれぬことはない。」といつて居られるのも、消極に過ぎるものである。ここは絶対的に「ウラメシ」でなければ、歌意を徒らに論理的に合理化するのみで、心情表現の特殊性は失はれてしまふ処である。

（ロ）「置きてぞ歎く」の「歎く」について。

ここでは「歎く」の語意が問題である。これについて以下二類はいづれも解釈非なるものといふべきである。

一つは、「曾許之恨之」を、（イ）に述べた如く、「怜之」の誤と見るものの解釈であつて、これにも二通り、（a）は、この句を「そこがおもしろし」ととる処から、「歎く」の語意を「賞美する」の

意にするもの(「檜燭手」「折口氏口歌」であつて、(b)は、「歎く」を「残念に思ひ歎く」意にはとるが、「残念に思ひ歎く、そこに味あり」と見るもの(「古義」安藤野雁「新考」)である。この両説は、「怜之」が既に不成立であるから、(a)の語意も不成立、(b)も「歎く」の語意そのものはよしとしても、さうした心情の關聯に於ける「歎く」ではない。この両説とも、歌意の合理化を求めるあまりに、歌の心情を破壊したものである。

二は、「曾許之恨之」とは關聯なしに、「歎く」を「賞美する」意とするもので、吉田増藏氏の「萬葉集の長歌を漢文修辭法より見たる一斑」(『萬葉論』)に述べる説である。吉田氏は漢文修辭法と比較してこの歌の構成を論じ、春は「曾許之恨之」に承接され、この「賞美する」は、「それゆゑ秋をよしとする」として、結句に承接されると見るものである。氏の説からいへば、「賞美する」の語意は成立するが、これは、あまりに漢文修辭の合理化にひきつけすぎるもので、これでは、人間心情の眞実に触れぬ、何のための歌ぞと思はれてくる。(向、氏の説述)

結局、この「歎く」は、次の句を「ウラメシ」と訓んだ上で、「残念に思ひ歎く」意とすべきである。

(ハ)「そこしうらめし」の解釈如何。

「仙覚抄」の「管見」が、「そこし」を「そこはく」の意とするのは論外として、「そこしうらめし」を、春山のことを承けるといふ説がある。「代匠記」・金子元臣氏(「評釈」)・吉田氏(『論文』)がこれである。これは恐らく、「うらめし」に直ちに「秋山われは」とつづく一見矛盾的に見える処から発するものであつて、「代匠記」は「恨

めしとは春に心ゆかぬ所のあるに恨みを残すなり。」といひ、金子氏の如きは、

「春山はあの点が恨めしい。だから秋山の方に団扇を上げますわ。私は。」

と解釈され、徹底的の合理化をめざして居られる。

吉田氏は、前述の如く漢文修辭法と比較して、この歌の構成を論ぜられ、漢文の承接法より、この句を前後とは独立の句として、春山のことはこの句で承接し、秋山のことは「秋山吾者」で承接するとされ、更に漢文修辭の互文法より、この最後の二句を、「詞は対句をなさざれども、其の意は相反し、其の表現の形式は対句たるべきなり」とし、「十二分に判断の意義を表現すせば、左の如くなるべし。

そこ「春山」し 恨めし「吾者」

「こ」秋山「し」しぬふ「吾者」

と、独自の説を述べられた。これではまことに明快な論断で、論としては敬服の外なく、且大陸文学の影響多き当時の歌壇を思へば、さもありなかなと思はれるふしもあるが、この見事な合理的表現では、日本的抒情は手も足も出なく、まして豊かな情感の持主たる額田王が、その極めて女性的なる心情の波動を、果してかやうな割りきつた仕組の中に、表はし得たらうかを怪しむのである。

前の「代匠記」金子氏の説とともに、論理にあはせずして、人間の女性的な生きた抒情の余地なからしめるこの解釈には賛し難い。

こけ、その他の殆んどすべての諸註の説く如く、上句の「青き」をば置きてぞ歎く」を承くと見るべきである。而して、諸註のうち

「燈」が「おもひろき方を言外とし、却つてうらめしき方を詞とし給へるは、倒語の妙処」といつてゐるのは、心情の奥処に触れた言といへよう。「そこ」の意も山田博士のいはれる如く（「講義」）、「その点」などいふ抽象的な意に用ゐられたと見るべきである。ただ山田博士が、「その秋の批難は、春山全般の弱点なるを言外に知らしめ」（「講義」）といはれるのは、これまた結論（結句の判断）への合理化を急がれる言辞といふべきである。

（ニ）「秋山吾者」の訓について。

「秋山吾者」を「アキヤマツワレハ」（西本願寺本）「流布本」代匠記初「考」「新考」、又「アキヤマヲレハ」（細井本）「倅案抄」「新考」と訓むのは、「曾」「乎」字のある本もなく、のみならず、徒に論理的正確さに資するのみで、折角の結句の感情の躍動を妨げることとなる。ここは宣長（「玉の小翠」）に従つて、「アキヤマワレハ」と訓むべきである。

以上、主なる問題の点をかへりみたが、その他の問題は、表現構造について述べる際に、適宜留意してゆくつもりである。

四

さて、この歌に対する従来の諸註の考へ方はいかがであらうか。諸説皆、この歌は、前半に大体に於いて春を否定し、後半に大体に於いて秋を肯定し、結論として、秋をよしと断定するものと見る。中には、もつと強調して、前半は、春を完全に抑へ、後半、秋を完全に揚ぐと見るものもある（金子元南氏「評釋」、吉田氏、武田博士の「新解」）。

「新解」の如きは、秋の断定に導くためには、秋の肯定の部分が弱すぎることを懸念して居られる。

而して、総じて、この歌には春（花）と秋（黄葉）との優劣が論ぜられると見、従つてその論証方法は理路を踏み、議論的理智的であると見て、そこからこの歌の評価も、替める側に立てば、一般に作者の理智の光が見られるとし、（武田博士「講義」）「全註釋」議論的なものを歌にしたのは妙とし、（「全註釋」）

知的にして具体感があるとか、（小宮豊隆氏「萬葉人自然」）「縁岸義秋氏」「萬葉佳詞」等々の批評となる。また貶す側に立てば、

理になつみ歌の味はひを欠くとか、（金子氏「評釋」）

才氣でこしらへられた構想であるとか、（今井邦子「阿田女王研究」）

対句でかためたお雛様式の形骸にすぎぬつまらぬ作品であるとし、（「萬葉精粹の鑑賞」）

（山本博士）

内容が抽象的で描写がない（「全註釋」）

とする等々の批評を生むに至る。

しかし、表現が理智の筋道を逐ふことは、ほの見えるとしても、心情はしかく割りきつたものか、否か。いづれも歌の表現の表面的な面の觀察たるを免かれてゐない感がある。

更に、諸註の中で裏面に立入つた觀察に触れるものを見ると、山田博士は「さてこれにて春秋の可否決着せりといふことを得ざるは勿論なれど、婦人としての實際の感情真にかくありしならむ。（「講義」）といつて居られる。これは正鵠を得た言であるが、考察の後にはば余論として述べて居られるもので、根本の解釈は、上掲の理路の線に添うてなされたものである。

また、窪田空穂氏（「評釈」）は、女性としての心情の個性が一篇を貫いてゐることをいはれ、特に優劣の基準を、手に取つて愛玩し得るか否かに置いたこと、秋山の全面的に黄葉しないのを嫌らずとすることに、女性の心情の機微を見て居られるのは同感であり、「個性的な感受を、論理的な構成に溶かし、整然と、安らかに、抒情味を漂はせつつ訓んでゐるのは、優れた手腕と称すべきである。」との評言も略々賛し得る処であるが、この見地から、さらに深く心情表現の構造に立入られず、よき評言にも拘らず、解釈は結局一般的表面的に終つてゐるのは遺憾といふべきである。

尙「全註釈」が、「……元來この人が花黄葉の眞の美に就いては同等に感じてゐた」ことをいひ、次田潤氏「新講」及次田眞幸氏「評説」が、この歌に花黄葉の優劣を判じ煩ふ心持のあることを指摘して居られるのは、心情の内面に触れた注目すべき言辭であるが、全体としては、これまた一般的表面的觀察に終つてゐるのを遺憾とする。

その他に、印象的直観的評言で肯綮に當るものも見られなくはないが、その由つて來る所以を明かにしてゐないものは、ここにかへりみるべくもない。

之を要するに、從來の諸註の考へ方は、時に表現の奥にはいつて心情の機微に触れるものはあつても、いづれも歌意の合理化に急で、優劣を判断するに至る論理的展開に中心が置かれ、心情表現の構造に触れること乏しく、心理展開の必然の波動を見おとしがちである。かくては、生きた人間の、更には女性の、歌によつて表出された情感の在り方を、見失ふに至るものではなからうか。

ここに、私の理解するこの歌の、心情表現の在り方を述べて、いかなる表現構造によつて心情はその全き表出をとげてゐるか、私の構造観を明かにしたい。

私は、諸註の多くが分ける如く、三段に分け、この三段の構成に添うて、心情はせりあげられ、高められ、行きつく処にいつてゐると思ふ。私の、諸註と異なる見解を述べるためには、各段に於ける心情の在り方をあとづけなければならない。

第一段

冬ごもり 春さり來れば……………(1)

鳴かざりし 鳥も來鳴きぬ……………(2)

咲かざりし 花も咲けれど……………(3)

山を茂み 入りても取らず……………(3)

草深み 取りても見ず……………(3)

第一段は、勿論「春」についての心情を述べた処である。

右の歌の(1)の処は、まづ「春」を提示する。しかも「冬ごもり」の枕詞は、武田博士の説（「冬ごもり考」）の如く、「冬の終から春につづく」意味にとるべく、ここに既に冬から春への（とどろ）されたものから解放されたものへの喜びの心情に於いて「春」は提示されてゐる。

この序奏にのつて、心情は更に鳥うたひ花咲く春への快適な喜び(2)に發展する。その喜びの肯定は、鳴かざりし鳴く、咲かざりし咲く、の如く、否定によつて、より強い肯定を導く方法で

「秋山千葉」の本体にとび込んだ心情は、直ちに愛賞の核心たる黄葉に迫り、前段の「春」のすばらしさに応じて、「黄葉をば取りて

ぞ賞ぶ」秋のすばらしさを訴へる（2）。殊に助詞「ば」によつて黄葉に対する愛着は特出され、いはば肯定の上の肯定となり、さらに助詞「ぞ」によつて、愛賞も倍加され、これまた肯定の上の肯定となる。図示すれば

肯定 ○○ ○○ …… (2')

となる。この一行の肯定観・讚美観は、まさに「春」の（2）の二行の役割を果してゐる処である。

しかるに、この「秋」のすばらしさにも拘らず、凡そその積極面・肯定面を、消極の谷におとす「青きをば置きてぞ歎く」否定面(3')の登場となる。ここもまた助詞「ば」「ぞ」の効果の関係は同じくで、両助詞は「青き」こと及び「置きて歎く」ことの無念さ・否定面を強調倍加する。従つて、この肯定否定関係を图示すれば、

否定 × ×
 × ×
 ∴ ∴
 ∴ ∴
 ∴ ∴

(3')

となる。この(3')の一行も、第一段の(3)の二行に応じた役割を果してゐる処である。

この(2')と(3')とは、また相ともに見事な対句をなして、恰も前段(2)(3)の二聯の対句の波動を、一つの対句に圧縮した感がある。このことはまた、心情の發展が、第一段より更に急迫した進み行きをなして、流動するところで、(2')(3')は図表にも明かな如く、肯定否定相中ばし、「秋はとてもよい、しかしまた、とても無念だ、どうしたらよいだらう」との、女性的な心情の揺らぎ・迷ひは、前段の場合に依じて、更にそれより激しくせりあげら

れて、うち出されてくる。結局、第二段に於いても、「秋」は、決めかねる迷ひのうちに、うち置かれてゐるのである。

この度も手に取れる取れぬの女性心理の愛情の機微を、心情の揺らぎの契機としてゐるのは、前段の場合と同じであるが、今度の場合は、手に取り得るすばらしい喜びと、取り得ないもののある無念さを対照してゐる処が異なる。この、手に取り得る喜びのあることが、第二段そのものとしては秋に対しても決しかねる迷ひに終つてゐながら、結句に「秋山われば」をうちあげる、心理の裏の契機となるものである。

尙、この「青きをば置きてぞ歎く」は、第一段の（3）の場合と同じく、文字の上では否定面でありながら、それゆゑに却つて、心情はこれまた思ひきりのつかない方向への発展をとげて、心理の裏では秋への愛着をいやましに増さしめてゐるのである。かくて、第三段、「そこしうらめし」に発展する必然性が認められてくる。

以上述べた如く、ここまでの処では、結局に於いて、「春」が、肯定もされきれず、否定もされきれず、判断しきれぬ処にあると同様に、「秋」も亦同じ状態の心情の揺らぎの中にある。かやうな表現の中に、私は、ゆきとどいた女性らしい情感のこまやかさと、ゆたかさの波動が、表出されてゐるのを感じるのである。

第三段の(一)

そとしうらめし

これまでの「春」「秋」に対する心情表現の在り方は、以上の考察によつて明かな如く、いづれを優るとも劣るともいひ得ない、「春」

「秋」いづれに対しても、まさに等価値・等量の思ひである。図表の如く、「春」も合計肯定四、否定四、「秋」も肯定四、否定四。句数は「春」一〇、「秋」六、対句数は二聯対一聯、であつてもその圧縮緊密度の等量なること、以上の考察の如くである。「春」「秋」ともに甚だしく心ひかれ、しかも工合のわるい点を、甚だしく惜しまねばならぬ。かくては最後の判断をいかにすべきか。

ここに「そこしうらめし」の処は、文字面では、勿論、多くの諸註のいふ如く、前段の末尾「青きをば置きてぞ歎く」を承けるものであるが、「秋」に於いても遂に迷ひに終つたその心理の自然の連続から、この前段の末尾に心情の足場を置きつつ、更に迷ひを発展せしめてゐる処である。しかし、文字面からはかやうであつても、これを「秋」一方のみの歎きと解するならば、甚だ合理化された考へ方であつて、既に第一段で二聯の対句にうたひあげられた未解決のままに終つてゐる「春」への迷ひの歎きは、この表面の「秋」の迷ひの歎きを、心情展開の足がかりとして、表現の裏面にひたひたとうち出されてゐるのである。「春」の終りには、「そこしうらめし」にあたる言葉を入れずに、「秋」のことにつづいてこの句をうち出し、背後に「春」への迷ひの歎きを看得せしめる処は、あくまでも合理化さない、すぐれた女性心理の自然の揺らぎを表出せしめてゐるものである。

即ち、この句によつて、表には、「秋」への愛着の深さと、その充たされぬ無念さが、特に助詞「し」によつて微妙に表出され、裏面、「春」の二聯の対句の波動はここにも頭を擡げ來り、「春」への愛着と無念さもよみがへつて來て、迷ひの絶頂、殆んど判断中止のやむなきに至るほどの心情表出となつてゐる。

かくて、ここは、言葉は「そこしうらめし」であつても、その心情は、「さあ、どうしていいかしら」との、女性的なあまりに女性的な心の揺らぎの極点を表はし、しかも第一・二段より漸層的に急迫し來たつた心理波動のせりあげの場に於いて、おれんまの微妙さを表出するもので、この後いかなる結論が出るかは、不明のままに放置される処である。従つて、次の結句との間には、相当の休止が置かれねばならない。ここを理性的の論理に求めるのはあたらず、女性心情の心理の自然を、最も簡潔鮮明に表出した処といふべきである。

第三段の(二)

秋山われは

「そこしうらめし」の苦衷の葛藤の果に、何とか結論を出さねばならぬ処に、追ひこまれた(せりあげられた)心情は、殆んど無意識的な叫びとなつて、俗語でいへば「ええ、ままよ、秋山上」、或は「秋山にするわ、私」といつた、結論の表出となつた。これは合理的に解する諸註が、秋山に贅する強い結論の提示であるとなし、中には「鉄椎一撃」であるとか(金元臣氏)、「決然と軍配」であるとか(次田真幸氏)と述べて居られるやうな、強意の理性的結論ではなくして、「秋山われは」と倒装句法となつてゐる強調化も、迷ひの心情の究極的爆発として理解せらるべきものと思ふ。次の瞬間には「春山われは」とならないとも限らない位の、微妙な心情の揺らぎの中にある叫びである。このことは前段からの心情の在り方を見れば、極めて自然に理解出来る処である。

しかも、ここに、叫びが「春山」とならず遂に「秋山」となつ

たことには、表現の蔭に、心情展開の上の心理的必然性がある。

「春」に迷ひ、「秋」に迷ふ微妙な心情の揺らぎの背後には、「春」になくて「秋」にのみ可能の「取りてぞ賞ふ」ことは、「春」「秋」同價値の迷ひの底に、無意識心理的連続をなして存続し、「そこしうらめし」が文字面では、「秋」について言はれてゐるその留意のはずみに乗つて、心情表現では全く五里霧中に迷ひながらも、瞬間、「秋」に傾く必然の微妙さを持つてゐるといふべきである。決して「取りてぞ賞」び得る故に、「秋」に軍配を挙げるとなす如き論理的必然ではない。「そこしうらめし」によつて、表面的には一見「秋山」への難点を示したあとには、かりに物を表面的合理的に考へがちの一般の人々にとつては、「春山」と結論が出さうに思へる処を、その人々には気づかなさうな無意識心理的部面を發展せしめて、合理的常識的思考の筋道をのり越えた処で、「秋山われは」とうち出してこそ、すぐれた女性心理の微妙繊細な律動を窺はしめ、その巧みなる表出を具現せしめたものといへよう。

尙、この「秋山われは」の処を、額田王の悲しい心の自らなる表はれと見たり（今井邦子「額田女王研究」）、「燈」や金子薫園氏（「額田女王」第一巻）の如く、天智天皇対大海人皇子の問題に絡ませた心境と見るのは、聊か穿鑿にすぎはしないだらうか。

以上、私はこの歌の表現を通して、その内面的心理関係の理解に立ち入り、心情表現の構造を明かにして來た。私は、かかる表現構造の理解に於いて、初めて、女性としての作者の生きた情感の表出、從つてこの歌の眞意は、把握出來るのではなからうかと思ふ。

六

さて、私はこれまで、作者個人の心情表出に即して、以上の表現構造を求めてきたが、この構造より考へられることは、作者は必ずや第三者（聴き手）を多分に意識して、この歌の構成をはかつたであらうといふことである。この点についての考察を次にすすめて、私の構造観の一つの裏付けとしたい。

もともと、この歌が、いかなる事情のもとに生まれたかは、初めに述べた如く、題詞に示す以外には詳しい事情は定かでない。ただ推定出來ることは、春山萬花之艶と秋山千葉之彩を競憐する文雅の御遊の如きが宮廷に行はれて、額田王が歌でその判断を申上げたといふことである。更に推定すれば、ただ天皇に奉答申上げたといふのではなく、天皇初め鎌足及び諸廷臣の集ふ席上、何らかの曲節で朗詠されたものであらうといふことである。そのことは、何よりも、さきに述べた歌の構造観よりいへることであり、また歌の簡潔明快なる点、対句を踏まへて調子よき点、時代も近江朝で、歌がいまだ口誦のにはひを抜きつてゐない点等よりいへることである。この場合、少くも後代に多き詠歌ではなく、多数の聴き手を意識しての歌であることはいへようと思ふ。

上來述べたつた如き表現構造を見れば、この歌は、恐らくは宮廷内の御遊の当座の席に於いて、歌の聴き手への反応をも意識して構成され、また聴き手の興趣を充分情感の極点にまで誘導するだけの、効果がたくまれて表出されてゐると思ふのである。

かやうに見て、その席の多数の聴き手（その中には春山秋山心々によしとするものがあらう。）を思つてみると、この歌の構造が、

聴き手の心々の反応と符節をあはせて、たくまれてゐるのを知るのである。以下その在り方を簡単に述べてみたい。(以下、便宜上、春山讀山體美の心の者を秋の符號を以て表はすこととする。)

(第一段)

多数の聴き手が大きいなる関心を持つてゐる時に、まづ「冬ごもり」から「花も咲けれ」までがうたはれる時には、「春」は、その発展的な意味と律動に共感共鳴を覚え、「秋」は、蕭然と事の成り行きを待ちかまへる。

「咲けれど」の「ど」によつて、「春」に思はず憂色が見え初めるとともに、憂の中に待つてゐた「秋」は、どうなるかと聴き耳を立てる。

「山を茂み」「草深み」の一聯の対句に、「春」は、いよいよ憂色につつまれるに對し、「秋」には、喜色が見え初める。

(第二段)

單刀直入に「秋山の木の葉を見ては」とりたひ出されて、既に喜色の中にある「秋」は、大いなる期待に次句を待ちかまへる。「春」は憂色のまま、成り行きを危ぶむ。

「黄葉をば取りてぞ賞ふ」に至つて、「秋」は、いよいよ喜色満面に流れ、「春」は、顔色なく、沈黙。

と、一瞬、「青きをば置きてぞ歎く」となつて、すぐ前まで、「秋」に旗が上りはしないかとさへ思へて、喜色に充ちてゐた「秋」は、思はぬ憂色にかはり、それに対して、今まで漸を遂うて悲歎の淵に追ひやられていつた「春」に、思はず二度目の喜色がおとづれる。

(第三段の(一))

「そこしらめし」で、「秋」は、いよいよ望みなきかと、憂色につつまれ、沈黙するに對し、「春」は、今度こそ望みありと、喜びにはずむ。「春」「秋」ともに固唾を呑む。緊張の極。小休止。

(第三段の(二))

意外にも、「春」の望みは一瞬にして落膽の谷に投げ出され、「秋」の不安と危惧は、これまた一瞬にして、歡喜の岡に「秋山われは」を歡呼して終る。

兩者喜憂の流れを图示すれば、左の如くとなる。

〔春〕 喜 ↓ 憂 ↓ 喜 ↓ 落膽の谷
〔秋〕 憂 ↓ 喜 ↓ 憂 ↓ 歡喜の岡

春に心を寄せる者も、秋に心を寄せる者も、心情発展の漸を逐うて一喜一憂、全く翻弄され通して、しかも兩者に一刻たりとも緊張をゆるめる時を与へず、最後のせりあげ。(第三段(一))(二)に持つてゆく呼吸、寸分隙のない構成となつてゐる。

私はこの歌を、かやうに見て來て、さきに述べた心情表現の在り方も、必ずや第三者への反応と効果を充分考慮のうちに入れて、構成されてゐると思ふし、また、この歌の成立事情も窺へて來るのではないかと思ふ。

かくて、この歌の心情表現は、表現の内面的心理關係の理解の上からも、第三者を意識しての構成の上からも、兩者符節を併せて、緊密なる關聯を保ち、しかも女性的情感あふれる巧緻なる表現構造を見せてゐるものといふべきである。

七

「賀茂翁家集」の中に、「額田姫王はいにしへのみやび人なり。春秋のあらそひを判給へりしなん、をみなごころのおかしき。」（卷之三）との、簡にして要を得た評言が見られるが、その女心のをかし

き姿は、心情表現の構造のかやうな理解の上に於いてこそ、その艶美の花を咲かせうるものではなからうか。

私は、以上、従來の諸註とは別箇の理解の上に立つて、私見を試みたが、幸にこの一試論が、額田王の「女心のをかしき」実想を伝へんことを祈つて、稿を閉ぢる。（了）